

三心やの光



三心の巻



御遺文

三心

吾人は如何安心を發して 阿彌に報じ奉らん。菩提心相甚だ多し 本願の三心によりて奉行せん。一至誠心 二信樂 三回願欲生。至誠は眞實心なり 眞理なり。阿彌に歸命信順して 眞實心なれ 此眞實の體は阿彌の法身 卽神聖態なり 正義なり。此神聖に對して 命令的性質なる故に 之に信順す。一切此神聖の眞理に信順せざるべからず。此眞理に乖く時は如何にして菩提を成ぜん。此眞理に遵信せば理として佛道を成すべし。すべて此眞理に隨順すべし。此理に順がふ故に成佛す。此理に乖くが故に迷没す。十方の諸佛は此理に隨順して成佛す。一切衆生は 此理に順せざる故に迷没す。此眞理は自性天真獨朗常然 悉く此眞理に順信せざるべからず。起信に法性の無住に隨順して常度衆生 法性離諸過に隨順して罪惡を止め 法性の離痴に隨順して志求佛法 法性平等に順じて彼此を念せず。又々法性の體無慳貪に順して 施を

行し 法性無染に順じて戒を行す 法性離瞋に順じて忍を行じ 法性離懈怠に順じて進を行じ 法性常恒に順じて禪を行じ 法性離無明に順じて智慧を行す等。

眞理の神聖に信順して 越求施敷せざるべからず。又眞實心には 眞實無偽の正義あり。導師の一切身口意三業の所作 悉く眞實心中に作し 清白正潔なること 菩薩の所修の如くせよ。眞實白道を遵守して 私慾に意志をするなかれと。

自利々他共に眞實なれ。眞實に一切の惡を捨難し 眞實に一切の善をなせ。雜毒の善と虚偽の行とは佛の正義を()處なり。眞實心に此生死三界の依正を輕賤し不善の三業を眞實心中に捨つべし。善の三業をば眞實心に作すべし。内外明闇を簡ばす 必ず皆眞實なるべしと。神聖に隨順し 正義にして無偽なるを眞實心と名づく。

信 樂

深く阿彌陀佛の恩寵を信じ 阿彌恩寵の本願を信じ 彼の恩寵を愛し 深く信じ 深く愛樂す。深く信とは光明大師曰く決定して深く信す阿彌陀佛四十八願をもて衆生を攝受し給ふ 疑なく慮ひなく彼の願力に乗じて定んで往生を得ると。決定して深信す自身は現に是非惡生死の凡夫曠劫已來常に没し常に流轉して出離の緣あることなしと。

阿彌陀佛無限の恩寵を以て 因位法藏の大願を示現し 果位報身を現じ給ふ。十方國土の 法報應乃至變化身を示現して 十方界に於て 一切の衆生を度し 別しては法藏の行因を示し 十劫正覺の方便身を現して 衆生を攝取し給ふこと 久遠劫より盡未來際 この方便を捨ずして 一方には久遠劫より 十劫正覺の身を現し 一方には盡未來際法藏の行因を示し 本來念劫圓融の由へに 假に時劫を現し 因果不二の

三

中に衆生の爲に 因の法藏として 果の十劫正覺を現して 衆生を救度し給ふことを信す。絶對恩寵より釋迦牟尼を化現し 及び歴代の宗教家を發現して 法界緣起の恩寵として 常に一切を濟度し給ふことを信す。

一切十方國土 及び衆生は 絶對阿彌の本質をもて根底とし この理性に統攝せられて 之を發展して 歸趣すべき理性態ありと信す。

衆生の理性に佛性ありと雖も 恩寵の緣因によらざれば 佛性開展して 了因即解脫靈化せられざるものと信す。

之を解脫せん爲に 十方諸佛聖賢變化身等を現じて 一切を度し給ふと信す。

深く信す 阿彌の本質は 絶對眞正態にして 其の内容には 無盡の妙色二報の莊嚴は啓示によつて證明するを觀經に説給ふこと。

阿彌の本質は 絶對精神態にして 物質に非ざれば 阿彌及淨土を眞實は 自然と表面に發現して 阿難を感ぜしめたる容は 是元大我の無限の眞光の動機に外ならず。即ち

爾時世尊 諸根悅豫姿色清淨にして光顔巍巍たり。時に 聖旨に阿難は忽ち感發せられて 即合掌して 白して言く 今日世尊は青蓮の眸り纖月の眉丹果の唇に笑を含み給ひて 皓雪の齒を露し 清根に悅豫をあふれ 姿色清淨にして 光顔巍巍たり。明淨なる鏡の影の表裏に暢るが如く 威容顯曜にして超絶し給ふこと無量なり。未だ曾て御麗しき殊勝なる今日の如くなるを見たてまつりしことあらざりし。大聖我が心に念言すらく 今日世尊は内容に奇特の法に安住。云々

世尊よ 弟子等大聖を念し上れば 歡喜内に悅豫して 自ら表に顯はる如く たとへ世尊といへども 亦他の如來を念じ給ふに非ずや 何故ぞ威神の光々たる 乃ち爾るやと。教祖釋迦牟尼の感應したる 阿彌に非ずや。曠光の流彩無心にして十方に明かに 阿彌の内容は 絶對にして 萬法を含藏して 法界に周し。心華開くときは 執が感ぜざらむ 孰か融合せざらん。

五

華嚴に如來甚深境界眞量等虛空 一切衆生入而實無所入安立 主我超越して大我の中に融合したる状態は 機能致一に 内に非ず外に非ず 中間に非ず 絶對無二。是よりは 大我の中に安立して 表面よりは個人なるも内面は絶對と致一 阿彌の中の自己として 従前の自己とは更轉して 所謂變易の心。歡喜の光の内容充され平和にして自然の靈福を感じ。八風眼耳を吹くとも 内容は阿彌の中に泊し 六賊競來りて侵害せんと欲するも阿彌城廓に安住して。歸命投入 永く忍土の終り心亡じ身致し乾坤斷破す。身心土を擧て悉く歸命す。

融合 致一

一炷の香煙は忽ちに 第一義天に昇りて 跡をとはず。一滴の水は 大海に投じて 差別なく 我忽ち亡びて 眞我に投合し 乾坤開て無限の眞心露現す。斯の如の説明は理に止りて 未だ心情の妙味なきは 是感情融合の意ならんや。絶對と融合の状は 歡天喜地 身心融液 不可思議のさま 何を以て其の妙味に比せん。春の彌生の櫻花は霞の中に麗しき色を呈し復しき香を發して無情ならず 天機の妙を洩して 融合快樂の状態を呈す。神は三昧耶の深秘の奥定室 絶對無限の精神に融合し 微妙自然の感情 身心融液不可思議のさま 深秘の内容に法身の妙容を感じ寫象す。心情には神交渉して 融合の妙感花の色香に比せんも華には情なし。深秘融合最も麗しく 香しさ 最深密幽玄にして また深秘の神靈との交感によりて聖胎佛種子發萌して 初めて聖法子と成る 是深秘交感融合 宗教生活の泉源にして聖種薰發の源となる。一切

七

活動の原動力と成る。

既に融合致一 入我々入 最深眞の自己として 心情いつしか轉す。

この有爲の依身のあるほどは 八風おとづれて 喜怒哀樂の浪波なきにあらざるも 忽ち轉ずること自在なり。

心情眞我に融合感覺せる 内容は深秘の中の秘密なれば 決して他人の窺ひ知るべきに非ざれども 教主釋迦牟尼の内容に充塞して掩へからず。

歸命の感情を 導師親經に 希夫人に寄て歸命の心情を露せり。

經文の意は この身と世界とを 客觀的に離るゝことを願ふ如くなるも 其實主觀的にして 故に程なく投命して 無生忍を悟れり。今の文は歸命を情の表すのみ 斯く自己 及び世界依屬をすて、絶對阿彌の智願海に 自己の一身を投じ 主我を眞我の中に歸命する。忽ち亡す 香爐一點の雪と 消滅したる一念は 即ち永く三界の苦輪を離れ 一超眞入如來地。

愛 樂

深く愛樂し上る 絶對根底としての佛陀 個々の統一者たる阿彌 恩寵をもて 解脱靈化し給ふを愛樂し上る。絶對にして萬物の獨尊 一切を統攝し歸趣すべき獨尊を愛し上る。罪惡に亡びたる吾等を深く愛して 方便を以て罪惡より脱却し神聖化し給ふ恩寵を愛樂し上る。

絶對無限にして 一切處に聖徳と恩寵との充滿せざる處なき この無縁の慈悲者を愛し上る。不可思議の妙用あつて 衆生の見聞に隨て 塵沙無數の妙色相好寶莊嚴依正を示し給ふ妙用者を愛し上る。

聖名に一切の萬法を詮表し 聖名によりて 無限の光と壽と 及びすべての無限の靈徳を表し 衆生に 名によつて感應せしむる恩寵を愛し上る。一切の時一切の處として 充滿せざるなく 念に隨ひ思に應じて映現し 無限の愛を垂たまふ無縁の大慈

九

悲者を愛し上る。

罪惡より解脱して 自己の本質に同化せしめ 無限の光と壽と 及び一切の靈福と化し給ふ威神者を愛し上る。

一切所現の一切身心土は 塵沙無限なるも 能現の主體に比すれば 非眞非善非美なり。至眞至善至美なる 救世者を愛し上る。

一切の善と正と眞と美と 阿彌の愛し給ふ處は 悉く愛し 阿彌の愛し給はざる一切の惡と邪と非眞等と すべて之を厭捨す。

一切衆生は 悉く阿彌の愛し給ふ處なる故に 悉く愛せざるべからず。

願 望

眞心は法身智慧の神聖正義に對する衆生の信仰にして 信樂は佛の恩寵に對する衆生の信仰と愛樂と是心情作用の信仰なり。

第三は神聖正義の正因佛性は恩寵の緣因佛性によりて相合して了因佛性開展す。

智力と心情との信仰は盡たるも 未だ意志の信仰に至らず。欲生は意志の佛的活動なり 神聖正義恩寵を離れて活動すべきものに非ず。先の三徳は衆生の至心信樂となりて 其内容に充ちたる衝動より實行を動かすは 即ち願望と成るなり。願望亦是欲望なり回願心とも菩提心とも名く。名は種々に異なるも 最高なる宗教的欲望に外ならず。

願望に二面あり 一を上求菩提二を下化衆生と云ふ。また往相還相とも向上向下共是大菩提心なり。論註に願往生心とは願作佛心なり。願作佛心とは 願度衆生心なり

とは是なり。

上は十方諸佛の已に開覺して同く阿彌の性能を具有したれば 願くば開展して諸の如來と同じく無上菩提を證せんが爲に 神聖正義に信順し恩寵によつて解脱靈化せん爲に 自ら進みて一切の彌陀の神的行動に活動して 上菩提を證せんことを望み 下は一切衆生悉く阿彌自性の性能を具するが故に共に無上道を證得せんことを望み 上は一切諸佛の本覺心に合て 一切如來に同一の慈力あり 下は一切衆生と合て衆生と與に同一に悲仰す。

上十方諸如來も同じく阿彌の自性具するが故に 諸佛の菩提に同じく神聖正義に隨順し 恩寵によつて解脱靈化し 其正規の道德秩序によらざるべからず。

下一切衆生同一の理性なれば 當成の佛 阿彌と同じく法身として共に相愛して誘ひ慈心をもて相向ひ佛眼をもて相看て 菩提まで眷屬し眞の善知識となつて 同く阿彌に歸入せんことを願望す。是を願作佛願度衆生といふ。

涅槃經に五聖行を明す 聖行梵行天行嬰兒行病行。聖行はあみの神聖態に順して上佛を求む。神聖態を奉じて涅槃即生死なるを知るは苦諦の慧。菩提即煩惱なりと知は集諦の慧 煩惱即菩提と知るは道諦の慧と名く 生死即涅槃と知るは滅諦慧。

若は定者は慧若は思惟等一切の三業の所作は 悉く神聖なる道心の命令によつて行爲を照して上求の道を誤らずして趣向するは聖行也。聖行は靜慮と慧を照す。禪に數多あり。四禪四空等十二禪又觀禪修禪薰禪あり。唯一心正定に靜に觀慮て自己を空にして絶對眞心の本然清淨にして 自性天真至理の阿彌神聖態を觀じ 彼眞體は一切を超越す。信論に如來は見相を離れて徧せざる處なし 心眞實の故に是諸法の法體なり。自體一切の法を顯照す大智用あつて。

又慧とは如來に佛智不思議智不可稱智大乘廣智無等無倫最上勝智あつて 此の智慧衆生の心機の知見を開示して佛の正道に入らしむ。

佛智の神聖の光のうちに一切身口意の三業を此指命の中に行動するを聖行と名く

二に梵行。梵とは清淨の義清白にして正智見の行動する。正義にして三業四威儀の清淨皎潔にして珂雪よりも白く志節高潔にして氷霜に超ゆ。身三口四意三共に清淨にして道心堅固にして自ら三業四威儀をして無上道中に行道せるを梵行といひ無上道戒とも名く即阿彌の正義なり。

三に天行。恩寵。天の萬物を化育する如く四時行はれ萬物成る如くあみの恩寵は法界に周偏し客觀界の法規となつて流布し之に逢ふものをして恩寵を開展し解脱靈化せしむ。正因佛性に神聖正義理性具備すとも恩寵によつて開展するに非ざれば解脱轉化すること能はず。

土地あり植物の種子を下すも天の氣に緣るにあらざれば發育する能はざるが如し。此恩寵によつて自ら了因佛性開發して攝取せられたる上はまた佗をも同一の理性を具するが故に阿彌の天行即恩寵に協賛して自ら信じて人をして信ぜしめ大慈普く傳化すべきはこれ天行なり。

四に嬰兒行。自己は阿彌の嬰兒阿彌の内容に歸入して致一しぬれば無限光壽の一分子たり。自己は無限の父によりて精神養はれつゝある。

無限の愛を受け阿彌に對せば一切の世界も及び衆生悉く阿彌嬰兒にあらざるはなし。然るに衆生是を知らずして迷て自我を主張す。斯の如き輩に無限の愛の恩寵の法乳を頌ち共に和光利行諸の衆生を同く菩提本我佗なし菩提の彼我なきに隨順し自己を憐み給ふ恩寵にて佗を哀むは是嬰兒行なり。

五に病行。一切衆生は絶對理性の中に在て必然的に罪惡を具す惡は天然の人には主我の無明煩惱より天然普通の根元惡よりすべての病的惡弊病に至るまでの惡を病とす。健全とは理性而菩提正道によりて神聖正義と恩寵によりて惡弊を脱却することとをうれば理性の健康態なり。良心が自利の惡を療す。恩寵の藥劑を以て治すべし。

(根本惡として未だ惡主義開展し及び任運に具たる根本惡と惡とは道德秩序即菩提の自利と他の佛陀の聖意に戻りたる情操と行爲とを)主觀の惡を邪と名づけ客觀

には惡と云ふ。阿彌の本性に背き無上道に障害をなすものは悉く惡なり。惡及び迷は眞理に非ずして脱却すべきものにして病の如し。惡は脱却すべきものを脱せざるは許容罪たるを免れず。この惡を脱するが爲に全力を盡さざるべからず。

苦毒あり苦毒の元因は煩惱罪惡なりこの煩惱罪惡の元質は天然無明と自我執着なり。一切の惡衝動違順の境に貪瞋を生じ愛憎を起し惡を生じ肉慾我慾これより生ず。人に惡衝動あり其衝動は道德秩序に衝突するは惡なり。この天然性格の衝動は無明とも云ふ動物元始なり普福なり。幸福本能より出づ。此幸福主義は惡衝動の根元にして惡衝動益發展して菩提に反背せる甚しきに至る。

良心即神聖正義は正因佛性として精神の健全なる活動すべき性能あり。恩寵によつて道德的善衝動を以つて惡質を治す。惡はつよかるもこれは神聖正義の内分と恩寵によつて惡質を解脱す。健全に道德心を養ふは全く惡病を癒すと同じ。

知力の病 身邊邪取戒等の知見病的は正知の觀念的藥劑を用ひ自我幸福本能より貪瞋癡慢を起し乃至肉慾等より起す病は苦によりてまた幸福主義又は苦毒の感情的病を起す之は恩寵によりて。無明病は神聖の見により十惡邪六弊等の意惡の病的には十善正六度等の實行的藥劑を用ふ。己に自己の病も佗に於ても同じく菩提善縁の恩寵をもてす。衆生の病我が病なり。其病を同じく度脱す。

四に嬰兒行。一切衆生悉く佛性吾人一切は同じく具有せる正因佛性にして生理機制に含密せるもそは修養に開展するに非ざれば之を發動すること能はず佛性具有するも恩寵と聖種の要素によりて尙恩寵によりて啓示解脱靈化等の修養によらざれば佛性開展して了因の佛を顯すこと能はず。阿彌の菩提態には之を修養開展して終局目的に攝取する處の理性と性能と有り。如何に性能を養ひ何に依て養ふや本然の佛性即ち正因佛性は人の理性として具せり。是あみの本體とまた一切慧と能との神聖正義の徳の性能なれば恩寵によりて開展する時は自己の理性本來絶對理性の阿彌と同一にして神聖によつて理性に隨順して眞理に契ひ正義として眞實

無偽なり 無量光壽を顯すべき性能あり。之を養ふには阿彌の恩寵に依らざるべからず。この性能と恩寵によりて開展し、修養する處の材料は即ち恩寵なり。菩提の法なり。そは心理と及び起行門に説明す。

心理には啓示とし感情には融合安立とし意志には靈化 菩提心と顯はる。是の佛性を開展すべきに必要な十善八正六度等は 意志がつまり神聖正義と恩寵によりて發達したる上は 阿彌の目的に協力して實行するに外ならず。阿彌の聖子として 阿彌の萬徳を圓滿に發展し 發達せしむるにあり。病行には一切の惡素質を消極に脱却して眞理を顯示するなり。嬰兒行には一切の正義なる道德的萬徳を圓滿に發展せしめ活動せしむるにあり。

無上菩提の三面

客觀的正義 絶對觀念が一切を發展して 終局に攝取して 一切を活動せしむる勢力なりとは已に論じぬ。

客觀界道德秩序は外界に顯現したる阿彌の勢力なり 客觀界には社會制度と顯はれ即ち娑婆即淨土の道德世界を建設する勢力なり。道德の増進は阿彌の目的なる故に道德の爲に力を盡す。即衆生濟度は阿彌の目的に増進せしむるなり。無上菩提は一方客觀道德秩序として顯れ 終局目的に趣向する勢力なり。阿彌勢力無上菩提は絶對にして 一切の處に道德秩序の安寧國を建設せん爲に 絶對精神の屬性として 一切智と一切能とは選擇本願力として 一切に含著し この選擇本願の力に憑らざれば一切の處に淨土を顯現すること能はず。選擇本願は是阿彌の正義として法界に周徧せり。選

擇本願といふも 個人的局部的にあらず絶對の本體に具する屬性にして 本然の含有せる理性なり。阿彌の正義にして一切の客觀道德の正善を選び 一切の客觀界に於て邪と惡に於ては捨捨する所の精神的勢力なり。

所謂國土の微妙天人の善惡に於て 一方を捨て 善をえらみ取るべき正義の勢力にて 絶對精神の屬性に外ならず。捨惡選善の正義の勢力を阿彌の本願と名づく。阿彌の正義の勢力は 一切處に周徧して 常に一切を開展して衆生精神の惡を捨て 善を開展せしめて 終局的に攝取して自己の勢力に活動せしむ。

道德世界の淨土を莊嚴せんには 必ず選擇本願捨惡選善の正義の法則によらざるべからず。絶對阿彌の本願力は一切に周徧せり。世界に含著せる阿彌の本願即正義の流は 善は光明にして 惡は闇黒なれば 惡は一時は盛なるべくも必ず善の光には照破せらるべきなり。而して惡は消極にして積極なる善の光明に照破せらるべし。

菩提即ち道德の障害をなすものは 雲の如く一時は覆ふべくも必ず消散すべく 惡は自己の目的と謂ひしも 還て善を莊嚴する器具に過ぎざるに至る。惡は脱却せざる可らざる自然力存せり。捨惡選善の正義の阿彌の勢力によらざれば 決して道德的淨土を建立すること能はず。

阿彌の正義は常恒に流行する故に 惡の黑暗は捨られ正善の光明は燦然として明かなり。阿彌の正義行はるゝ處は理想の淨土顯現せるなり。

無上菩提の選擇本願力とは 一切惡の惡を捨て善を顯すの客觀的正義に外ならず。正義は正道なり 正知正見終局目的に三業を行動せしむる勢力なり。正義は正知見衝動よりすべての邪を捨て 正に歸し 惡を排除し善に進むの勢力にして 正義によらざれば 清淨國土を顯現する能はず。

龍惡を捨てれば微妙顯る 雌雄淘汰選擇の自然力は物心二質を含蓄せること みな阿彌の選擇の勢力に外ならず。是正義はまた阿彌の本質を顯現する處の自然力なり。信論に云く眞如一如清淨一切の功德具足せば何故ぞ威儀等の戒行を要するや。答 譬

へば大摩尼寶體性明淨なるも(乃至)塵穢の垢あれば 唯寶性を念すとも磨をもて治するに非ざれば 終に明淨を得ざるが如し。眞如の體性久しく 無明煩惱に垢染せらるが故に たとへ眞如を念とも戒定慧種々の薰修せざれば云々。

終に正義是菩提の勢力にして また菩提即ち阿彌の淨土客觀道德秩序のすべての障物物を排除して 客觀道德秩序 即ち淨土を建設するの願力なり。

神聖態無上菩提の本質は 一切道德律の一大原則にして すべての道德的法規を制裁するのみならず一切を神聖同化する勢能の本體なり。阿彌は無上權威の理性とし法規として侵すべからざる大原理にして 命令的性質あるが故に神聖態なり 絶対精神即ち大我の理性として 一切を無上智慧をもて照す 理性なれば言を換ていはゞ絶対精神大我の良心と名づく。

一切諸佛聖賢も此無上權威の法規に軌て成佛しこの理性に軌て一切を約束す。阿彌は斯の如き無上權威の一大原理にして 一切を統攝し歸趣の本體なる故に經に 無量壽佛威神光明最尊第一にして 諸佛の光明能及ばざる處なり また無對光佛と號し奉る。

絶対精神即大我の良心とも名くべき理性態は 各個人の精神には佛性即良心として具備せり。各個人の良心は絶対の個體なれば 阿彌の命令に奉準すべき理性なり。また個人理性即良心は絶対理性の個體に外ならず。絶対理性の活動を大菩提と稱すべくんば 吾人ば自己の良心の大菩提の道德律に順じて 自律的に其の標準に率つて行動すべきを菩提心と名づく。

大菩提心は絶対理性に率ふて 自律的に道德秩序に順せざるべからず。客觀道德秩序は同じく阿彌の絶対理性なる故にこの客觀道德秩序に契ざるは改革策進してこれに達すべき理性有せるなり。

信論に 眞如の法中に於て深解現前して所修相を離るは法性の體は慳貪なきことを知る故に隨順して施を行ふ。法性無染にして五欲の過を離れたるを知る故に隨順して

尸羅を修す。法性無苦煩惱を離る故に隨順して忍辱を行ふ等と。宗教にては道德規律は自己と同じく佗の一切をも約束することを得 理性には自佗なきが故に無上權威あるの故に

絶対中なる自己にして理性に率ふ自律にして全く私なき意志 菩提の衝動行為は即阿彌の個體現として 其道德秩序は佗の一切と同じく 客觀秩序に致一することを得る 同一軌輻の判るべきが故に 斯の如きの個々秩序は終局目的に致一することを得經に此諸人等は皆阿耨菩提を得と 阿耨菩提は一道にして二あるなし。

佛性即良心は自ら道德律を立るのみならず 自ら其規律に對し 其標準に順ふ道心は無上道の司導として 其規律に對し道德的行為す 自ら立法者の命令するのみならず自ら道德行為の司法者となりて 常に一切の自己の規律によりて裁判をなす。

良心は私を離れて如實の理法に率ふて 侵すべからざる判決をなし 而して理性に準して 私なく偽なき已上は阿彌の聖意にして 真理と適合したるものなり。佛性即良心は自己胸中の阿彌にして 私なき良心の聲は内面の阿彌の聲にして この理性は主客兩界を双照して 絶対道德秩序に終局の歸趣の光を與ふべきため 個人の守本尊とし阿彌の法王子 即ち使命として吾人の頭腦に在り 吾人は良心の指令に順はざるべからず。是絶対神聖態の個體なればなり。(正知見に非ざれば菩提の正道得がたし) 内面正義既に絶対阿彌の理性の神聖態は 一切の道德秩序即無上道心の一大原理にして 神聖にして無上權威ありて 吾人の個人の理性とし 其理性に率ふ行動を菩提心なりと知りぬ。

昭和九年七月二十八日 印刷 (誌代年壹 圓)
 昭和九年七月三十日 發行
 發行所 山崎 成
 小石川區國分町六十五番地
 印刷人 小林 七太郎
 小石川區國分町六十五番地
 印刷所 靜文社 印刷所
 電話牛込五四一九番
 東京市小石川區水道橋二丁目四十四番地
 ミオヤのひかり社
 總發行所 東京六八五一番